

# 学内広報

for communication across the UT



特集：

■本郷地区、自動車入構有料化へ



2008.2.18

No. 1369

# 本郷地区、自動車入構有料化へ

「本郷地区キャンパスにおける交通改善の基本方針」に基づき、本郷地区交通対策専門部会により自動車入構における有料化の検討を進めて参りましたが、2008年1月21日（月）の役員会で正式に決定されました。2006年から駐車場整備計画を立案し、駐車スペースの拡大に努めているところでありますが、依然として駐車場不足となることは避けられない状況にあります。環境面や安全面からも不要不急の自動車利用の抑制を図るため、2008年の4月より自動車利用を原則有料化致します。ご理解とご協力をお願い致します。

本郷地区  
自動車入構  
有料化  
本年4月より  
スタート!!

## 本郷地区のキャンパス交通をどう改善するか？

～本年4月以降行われる一連の交通施策の趣旨～

本郷地区交通対策専門部会 部会長 家田 仁

### 今、何をなすべきか？

本郷キャンパスの交通に関しては従来から種々の施策が取られてきたところですが、不適切な駐車・駐輪、放置車両、必ずしも良好といえない歩行環境、不徹底な歩行者案内、あるいは病院前道路上の客待ちタクシーなど、まだまだ課題は少なくありません。

本来、本郷キャンパスは、大都市中心部に立地するキャンパスとしては極めて豊富な緑と快適な空間に恵まれ、また周辺には地下鉄5路線・4駅が近接して立

地する世界的に見ても公共交通の利用が最も便利なキャンパスでもあります。こうした恵まれた特質を生かして、多々ある交通問題を解決するのみならず、地球環境的な視点からあるいは快適な都市環境創出の視点からも、世界に胸を張れるような「賢い」キャンパス交通の実現を模索していくことが必要でしょう。では、そのために私たちは今何をすべきでしょうか？

第一は、徒歩・公共交通・自転車のような環境親和性の高い交通手段を中心に、**キャンパス内の自動車やバイクの利用を移動制約者による利用や荷物の運搬他やむを得ないケースに絞り込んでいくといった基本的考え方を徹底すること**です。

第二は、登録・駐車・駐輪・走行において、**一人一人のユーザーがルールを遵守し良好なキャンパス環境の創出に務めていただけるような状況を作っていくこと**です。

第三は、**駐輪場・駐車場整備や歩行環境改善などのハード面、あるいは進入ゲート管理や登録制度、取り締まり制度などのソフト面を充実すること**です。

第四は、良好な交通環境の維持・改善に必要な不可欠となるこうした**施策の実行に要する費用を出来る限り「受益者負担」の原則に従って賄っていくこと**です。

こうした観点から、各部局からの教員と事務職員及び交通問題の専門家により構成される本郷地区交通対策専門部会では種々の検討を行ってまいりましたが、本年4月より次のようなステップを追って、一連の交通施策を実施していくこととなりました。

### 今後の交通施策は？

#### ①2008年4月より

**本郷地区キャンパス内における自動車利用を原則的に有料化**します。あわせて自動車利用の許可証制度などを、自動車利用が不可欠な利用者にはリーズナブルな範囲でより使いやすいものとなるよう改正します。また、ゲートの電子化にあわせて自動車利用の実態を把握し管理を強化します。なお、開始から1年間は試行期間（社会実験期間）とし細部を再検討した上で2009年4月より本格実施します。（詳細は以降の記事をご覧ください。）

#### ②2008年10月より

構内の自動車交通量を削減して良好な歩行環境を確保し、あわせて道路空間の合理的な利用を図るため、一部区間の通行規制や一方通行化などにより**本郷構内の自動車動線設計を改正**します。なお、これについては2007年春に社会実験を行いその効果の把握や利用者の反応について調査しました。



本郷地区交通対策専門部会

部会長 家田 仁

(工学系研究科・社会基盤学専攻 教授)

## 自動車利用有料化の全体像 ～現状、そして改善すべきこと～

本郷地区では、教職員・学生・各種業者の車両入構に対して、年間の特別入構許可証の発行を余程の事情のない限り原則行わず、事前許可のない当日入構は3時間未満で出構させるなど、従来からこれを厳しく抑制してきました。しかし、一部で構内を駐車場代わりにするといった悪質な利用が認められます。許可車両に対する駐車場の位置も不明確である場

所も多く、建物入口近辺に駐車が集中し、歩行者の安全性やキャンパス空間の快適性が損なわれている事例も多く見かけます。これらの問題を解決するため、以下のことが必要です。

- ① 駐車場所を指定・整備しそれ以外の場所に駐車している自動車を厳しく取りしめる。
- ② 入構需要を抑制・管理するために入構

の有料化を図る。

①については各部局に2008年3月までに駐車場整備をお願いしているところです。それでも現状の需要を賄える駐車場数を整備することは困難であり、本年4月より車両入構管理システムを更新する機を捉えて、②の施策を試行することになりました。

### ③2009年4月より

本郷地区キャンパス内における自転車及びバイクの利用を原則的に有料化します。あわせて自転車やバイクの登録制度の運用を厳正化するとともに、常習者や良識を逸脱した違反者に対して警告チェーンを掛けるなど、不適切な駐輪等に対する取締り体制を強化します。これについても1年間の試行を経て2010年より本格実施します。

この他にも、従来、常に後手、後手に回されてきた駐輪場や駐車場の整備を、新規の建物等を建設する際に合わせて実施することのルール化や、キャンパス内の案内サインの充実などについても、今後、関係部署と協力しながら検討を進めていく予定です。

教職員・学生の皆さんをはじめキャンパスを利用する方々には、前述の趣旨に鑑み一連の交通施策の実施に向け、ご理解とご協力を賜りたいと存じます。

### 「施策のポイント」と「許可証の概要」

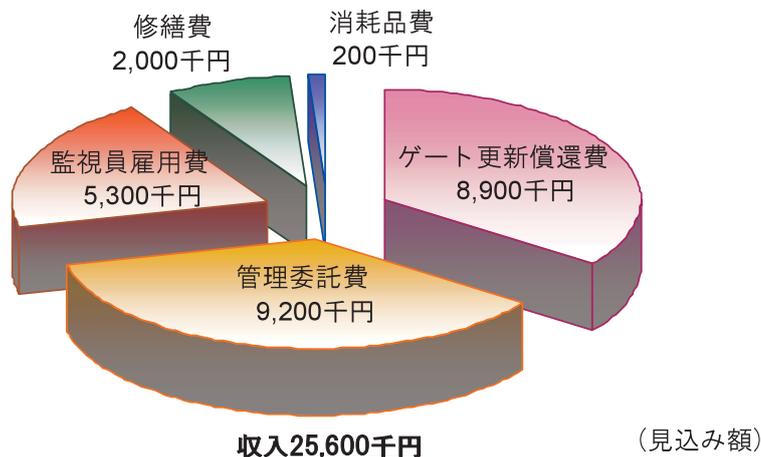
施策のポイントとしては以下の3点が挙げられます。

- (1) 利用の実態やその必然性を考慮した許可証体系の見直し
- (2) 周辺駐車場とのバランスを考慮した適切な料金設定による入構需要の抑制
- (3) 車両入構管理システムと取り締まり活動の運営経費の捻出

その結果、特待許可証、年間許可証、物流許可証、土日許可証、期間許可証、臨時許可証、当日許可証の7種類の許可証を設定することにしました。特待（無料）・年間・物流・土日・期間許可証は

その審査を本部で厳格に行い、必要最小限の発行数といたします。

一方、臨時許可証はその審査を全学共通の基準に基づき各部局で行います。特待許可証の発行基準を厳しくすることの代替措置として、6時間未満の利用を無料として多様な研究・教育活動のための自動車利用に配慮しています。当日許可証では30分以上の利用に料金を課しますが、これにより入構需要を大幅に削減できると考えます。なお各許可証の料金設定等は、1年間の試行の後に必要に応じて修正いたします。



### 利用負担金の使途について

皆様からお預かりした利用負担金(年間25,600千円)は、ゲート更新償還費(8,900千円/年、償還期間5年)、運営管理経費として管理委託費(9,200千円、故障時の24時間対応、精算機の集金・口座振込み、維持管理費)、不適切な利用を排除するための取締業務を行う交通監視員の雇用費(5,300千円)、修繕費(2,000千円)、消耗品費等(200千円)に使用します(上図参照)。

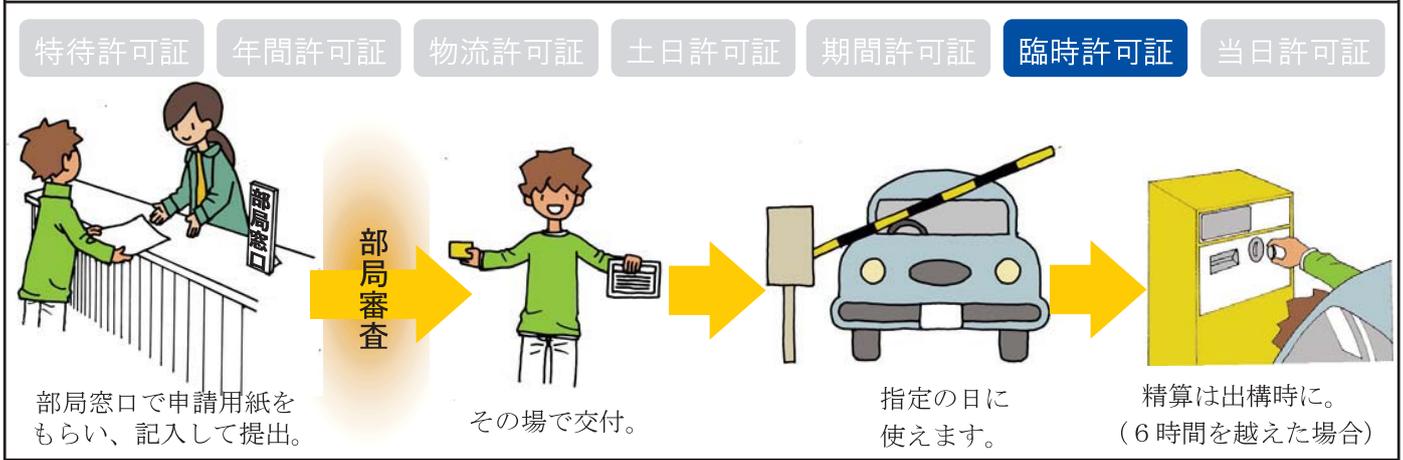
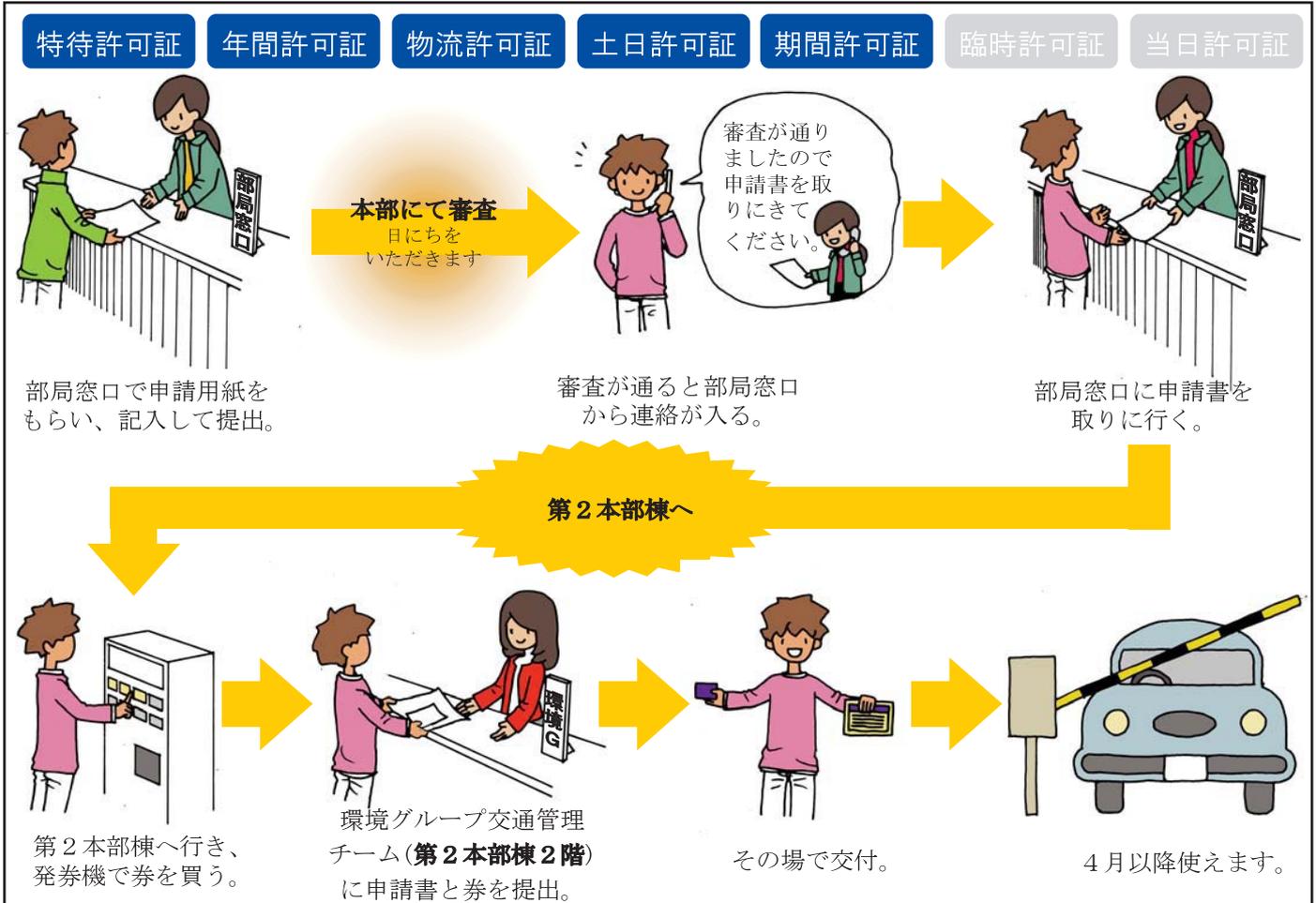
# 許可証の種類と料金

本郷構内に自動車が入構又は駐車しようとする方は、下記のいずれかの許可証が必要となります。  
 当日許可証以外の各種許可証は、申請時に厳格な審査を行い認められた場合のみ交付となります。

平成19年度	平成20年4月以降	
 <p><b>特別許可証</b></p>	<p><b>特待許可証 利用負担金：無料</b></p> <p>身体障害・疾病等のやむを得ない事由で公共交通機関での通勤・通学が困難な者、その他特別な理由のある者、緊急車両（警察、消防等）に対して交付されます。</p>	
 <p><b>年間許可証</b></p>	<p><b>年間許可証 利用負担金：20,000円/年</b></p> <p>審査の結果、年間を通して車両での入構が必要不可欠であると認められた者に対して交付されます。従来特別許可証の交付を受けていた者でも、理由によって許可されない場合があります。</p> <p>(例) 公用車(本学所有の車両)、構内巡回車両、ごみ収集車、生協・構内団体、業者(事務用品納入、機材搬入)、工事関係車両</p>	
 <p><b>物流許可証</b></p>	<p><b>物流許可証 利用負担金：20,000円/年</b></p> <p>審査の結果、年間を通して車両での入構が必要不可欠であり、荷物の搬入出等を目的とした1トン以上のトラックを利用すると認められた者に対して交付されます。基本的に年間許可証と同じですが、異なるのは、物流車専用駐車場を利用できることです。ただし駐車時間は30分以内とします。</p> <p>(例) 生協・構内団体、業者(事務用品納入、機材搬入)の貨物車、宅急便、郵便</p>	
 <p><b>期間許可証</b></p>	<p><b>期間許可証 利用負担金：1,000円/週</b></p> <p>審査の結果、特定の期間、車両での入構が必要不可欠であると認められた者に対して交付されます。入構理由は工事・荷物搬入に限ります。</p> <p>(例) 工事関係車両、本学教職員・学生等の荷物運搬車両、イベント資材車両</p>	
 <p><b>土日許可証</b></p>	<p><b>土日許可証 利用負担金：5,000円/年</b></p> <p>審査の結果、本学の教職員で年間を通して、土曜日・日曜日・休日に頻繁に車両での入構が必要不可欠であると認められた者に対して交付されます。</p>	
 <p><b>臨時許可証</b></p>	<p><b>臨時許可証 利用負担金：6時間未満無料以降100円/30分</b></p> <p>教育・研究等の目的により車両での入構が必要不可欠なとき、事前に交付を受けて利用してください。(交付の際は部局による審査があります。)</p> <p><b>教職員の方は、原則、この許可証又は当日許可証をご利用ください。</b></p> <p>(例) 研究・教育等の目的により車両での入構が必要不可欠である本学教職員・学生等の車両、講演するための来訪者、イベント資材車両</p>	
 <p><b>当日許可証</b></p>	<p><b>当日許可証 利用負担金：30分未満無料以降100円/30分</b></p> <p>本学関係者及び本郷構内に入構する必要がある者に対して交付されます。新しいゲートでは、二食ゲート・弥生門ゲートでの利用が可能になります。</p>	

# 新しい許可証の申請手順

許可証の申請：3月10日～ 許可証の発行：3月21日～



## 駐車場の種類と配置図

不明確であった駐車場が、有料化に伴って位置が決められました。5種類に区分された駐車場では、必要な車両を必要な場所に駐車することができるよう計画しています。

新たに設置された物流車専用駐車場は、基本的には駐車を認めないが搬入出時のみ駐車できる駐車場です。1トン以上のトラックだけに許可されており、一般駐車場に比べて広くスペースが取られています。また、指定車両駐車場は、各部局で管理する駐車場です。講演者や来客等、管理する部局にとって重要な車両の為に、計画的に利用することができます。

3キャンパス  
共通バスカード  
です。



### 入構許可証が統一

従来、本郷・弥生・浅野の3キャンパス（病院地区を除く）でそれぞれ必要だった入構許可証が統一され、**1枚のカードで入構できる**ようになります。また、本郷キャンパスにおける当日入構は薬学ゲートのみでしたが、新たなゲートでは、**二食ゲート、弥生門ゲートでの当**

**日入構が可能**になります。これにより、以前より問題視されていた正門前の交通量を減少させ、病院前道路の渋滞の緩和、そして利用者の利便性の向上を図ります。

### 入出構の管理が厳格化

他にも、新たなゲートでは入出構の記録が取れるようになります。申請した

内容通りに許可証が正しく利用されているか実態を監視すると共に、駐車場整備計画の基礎データとしての利用する予定でいます。

なお、二食・弥生門ゲート間は通り抜け防止策として、入構後10分以内は出構できませんのでご注意ください。



ご不明な点に対するご質問や交通問題や交通施策に対するご意見は、本部環境グループ環境企画チームまで、ご遠慮なくお寄せください。

《問い合わせ先》  
本部環境グループ環境企画チーム、交通管理チーム  
電話番号：03-5841-2255（内線：22255）  
E-mail：[kankyokikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:kankyokikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp)



(イラスト：岡部 望美)

# NEWS

## 一般ニュース

本部施設企画グループ

第2回柏国際学術都市支援会の開催

一般

1月16日(水)千代田区のパレスホテルにて第2回「柏国際学術都市支援会」が開催された。本支援会は、つくばエクスプレス線柏の葉キャンパス駅前から千葉大学柏の葉キャンパス・本学柏Ⅱキャンパスを經由して、本学柏キャンパスに至る地域をキャンパスタウン「柏国際学術都市」として整備することへの支援を目的としており、平成18年12月、本学と千葉大学が産業界に呼びかけ、キッコーマン株式会社の茂木友三郎氏を会長とし民間企業のトップ14名を委員に第1回を開催した。

第2回となる今回は、西尾茂文理事・副学長が司会を務め、茂木会長を始めとして7名の委員、小宮山宏総長、古在豊樹千葉大学学長、堂本暁子千葉県知事、本多晃柏市長からの挨拶の後、本学及び千葉大学の柏地区の近況報告として、磯部雅彦総長特任補佐(参与)から「東京大学サステナビリティ教育プログラム」「東京大学数物連携宇宙研究機構」「柏インターナショナルロッジ整備事業計画」等、天野千葉大学理事から「千葉大学環境健康フィールド科学センター」「千葉大学ケミレスタウン・プロジェクト」「千葉大学予防医学センター構想」等、北澤猛新領域創成科学研究科教授から「柏の葉国際キャンパスタウン構想」について説明があった。

会の後半では各委員から意見をいただいた。様々な貴重な意見の中で、第1回支援会後の約1年間で柏地区の教育研究環境の進展、またその発展に向けた計画への取組が格段に向上したとの評価もいただいた。

今回の意見等を踏まえて、次回以降同学術都市の社会への発信、さらには地域連携や産学連携を通じた「愛されるキャンパスタウン」づくりへの課題等について、具

体的な意見交換が行われる予定となっている。



茂木会長による開会挨拶



小宮山総長による挨拶

## 部局 ニュース

大学院総合文化研究科・教養学部

三鷹国際学生宿舎で「新年会」開催される

1月6日(日)、三鷹国際学生宿舎内共用棟ホールにおいて、院生会(留学生の生活をサポートするための大学院学生による組織)主催、宿舎生会(宿舎に居住する全学生を構成員とする組織)の協力による新年会が行われた。

この催しは、同宿舎に入居している留学生に日本の伝統的な正月の過ごし方を紹介することを通じての、日本人学生と留学生との交流を目的としている。正月休みで帰省中の宿舎生も多く、普段の企画に比べ参加人数は若干少なかったものの、日本人学生約20名、留学生約30名の参加者が日本の正月を満喫した。

参加した宿舎生は、宿舎生会宿舎委員、院生会メンバーからなる企画チームが提供のお雑煮を味わい、餅つきにも進んで参加していた。留学生のほとんどは餅つきを見るのもするのも初めてであり、杵を振り上げる友人を代わる代わる写真に収めて楽しんでいた。つきたての餅はその場であんこ餅、きなこ餅にして振舞われた。

会場の中央にはこたつが置かれ、日本の冬の茶の間の雰囲気醸し出し、百人一首やカルタ取りを楽しむ人々の歓声で満ちていた。また、日本の昔遊びのコーナーが設けられ、留学生を中心に、独楽、剣玉、羽子板といった昔ながらのお正月の遊びに興じていた。更に会場の一角には書初めのコーナーもあり、留学生、日本人学生を問わず、思い思いに筆を走らせていた。三鷹国際学生宿舎には、宿舎生の3割にあたる約180名の留学生が入居しており、院生会や宿舎生会を中心に、日本人学生と留学生との交流活動が続けられている。



初めての餅つき体験



つきたての餅を手に、はいチーズ



これぞ日本のお正月



大学院理学系研究科では、附属植物園及び生物科学専攻が中心となって、日本学術振興会の平成19年度「研究成果の社会還元普及事業 ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」に応募し、1月13日(日)、「熱帯植物の不思議をさぐる PART 2」を開催した。

本プログラムは、科学研究費補助金基盤研究(A)「石灰岩地域における日華区系植物の多様化と分化」(平成9～11年度)、同「南ヒマラヤ地域の植物多様性」(平成13～16年度)などの成果の社会還元の一環として、中学生・高校生を対象として計画した。

プログラムは次のとおりである。

●講演・スライド

邑田 仁 熱帯地域でのフィールド調査と熱帯植物の特徴

塚谷裕一 熱帯植物の葉の形態進化とその遺伝的背景

●温室見学

●熱帯の果物試食・フリートーク(クッキータイム)、  
未来博士修了証書授与式

参加者は父兄を含め、20校から36人であった。参加者のアンケートによると、大変好評で「熱帯植物には不思議なものがたくさんあり、おもしろかった」「また参加したい」という回答が多く寄せられた。



温室見学

スライドを使っでの講演には「分かりやすい説明で熱帯植物のことについてよく分かった」「フィールド調査の面白さなどを知ることができた」、温室見学では「一見普通の木に見えても実際はチューイングガムに使われているなどいろいろな発見があってとても楽しかった」「実際に温室に行き、植物を見ながら説明を受けられたのはとても分かりやすくおもしろかった」、クッキータイムには「ミラクルフルーツを食べると(酸味が甘みへ

変わり) レモンが普通に食べられるのにビックリした」  
「ドリアンなどふだん食べられない果物が食べられてうれしかった」などの感想が寄せられている。



熱帯の果物を観察、試食する参加者

プログラムの最後には、東京帝国大学から明治39年  
に出版された「大日本植物志」(植物図と記述は牧野富  
太郎による)第1巻第3集の表紙の図柄を使った修了証  
書が参加者に授与された。



修了証書授与

#### 生産技術研究所

部局

二木かおりさん(工学系研究科物理工  
学専攻博士課程3年)、「第5回東京大  
学学生発明コンテスト・発明大賞」受賞

1月24日(木)16時30分から、本学駒場キャン  
パスのファカルティハウスで「第5回東京大学学生発明コ  
ンテスト」の表彰式が行われた。このコンテストは、学  
生が発明や知的財産権に対する理解を深めることを目的  
に、生産技術研究所・産学連携委員会(委員長:桑原雅  
夫教授)、産学連携本部、財団法人生産技術研究奨励会  
(TLO)の共催で企画され、今回で5回目を迎える。例  
年より応募は若干少なかったが、その中から、二木かお  
りさんが「高純度オルソ水素分離精製装置」で、発明大  
賞を受賞した。発明大賞を受賞した二木さんは、次のよ  
うに、発明が自分に「降りてきた」瞬間を述べている。



発明大賞を受賞した二木かおりさん

「2年間かけて、装置を作製し、1950年代に発表され  
た論文と同手法で分離を行っても、まったく分離がされ  
ませんでした。その後は新しい技術や装置を取り入れ、  
改善していく試行錯誤の毎日でした。ある日、大きく引  
き伸ばしたデータを見ていた時に、今回開発した分離装  
置を思いつきました。その手法を試してみると、従来よ  
りも安全に、簡単に、精度の高い分離を行うことが可能  
になりました。あの時は緊張と興奮で本当に眠れなかつ  
たのを覚えています」

今回の発明コンテストでは、その他、生産技術研究所  
長賞に、江原晴彦さん(大学院理学系研究科生物化学専  
攻修士課程1年)の「調和振動子のシミュレータによる  
サウンドスペクトルの描写」、産学連携本部長賞に天野  
裕さん(大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専  
攻修士課程1年)の「くの字型スチールブレースによる  
伝統木造建築の耐震補強」、アイデア賞には、鴨頭輝さ  
ん(医学部5年)「適応型無遅延フィルタ」が、奨励賞には、  
大井泰史さん(大学院工学系研究科マテリアル工学専攻  
修士課程2年)「臭わずに香る靴 - 香印象 臭職活動  
-」の発明が、それぞれ選ばれ、賞とともに、副賞(金  
一封と上位3賞にはニコンの各種カメラ)が授与された。



喜びを表す受賞者と主催者

本コンテストの詳細は、発明コンテストのホームペ  
ージ(<http://hatsumei.iis.u-tokyo.ac.jp/>)に掲載されている。

## 東洋文化研究所

森本一夫准教授

部局

第一回「ファーラービー国際賞」を受賞

東洋文化研究所西アジア研究部門の森本一夫准教授が、イラン・イスラーム共和国政府から第一回「ファーラービー国際賞」(Farabi International Award)を受賞された。同賞は、イラン国内の人文学研究、および外国人によるイラン研究とイスラーム研究の優れた業績に対して与えられるものであり、受賞の対象となったのは、森本准教授の博士論文「サイド・系譜学者・ナキープ：十世紀後半から十五世紀前半におけるサイド／シャリーフ系譜文献の研究」(東京大学、2004)である。授賞式は1月26日(土)にテヘランにて行われ、アフマディーネジャード大統領から賞状が、UNESCOとISESCO(イスラーム諸国会議の教育科学文化機構)からもトロフィーが贈呈された。



イラン大統領から賞状を受け取る森本准教授

## 生物生産工学研究センター

創立130周年記念事業・東京大学シンポジウム「環境生命科学における微生物・植物バイオテクノロジーの最先端」開催される

部局

12月5日(水)と6日(木)、銀杏並木が黄色に色づく中、農学部弥生講堂において生物生産工学研究センターと農学生命科学研究科・農学部共催の本学シンポジウム「環境生命科学における微生物・植物バイオテクノロジーの最先端」が360人の参加者を迎えて盛会のうちに行われた。生物生産工学研究センターは、本センターが重要な研究課題と位置づけている「微生物・植物バイオテクノロジーによる環境修復・保全や食糧をはじめとする有用物質生産」をキーワードに、毎年シンポジウムを開催している。本年度は、新機軸として農学生命科学研究科・農学部との共催で行われた。上記のテーマに加えて、現在様々な生命科学分野でますます重要さが増してきた研究手法であるバイオインフォマティクスについても国内外の第一線で活躍されている研究者を演者として迎え、その最先端研究を通して今後の研究の方向性等

について討論を行った。

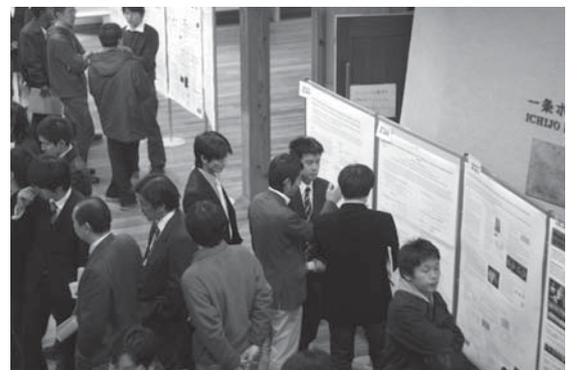
6日(木)の午後には、本センターと農学生命科学研究科の学生によるポスター発表会も開かれ、熱気に満ちた雰囲気の中、研究室を超えた活発な討論が行われていた。



基調講演をされる小宮山総長



シンポジストの集合写真



ポスター発表会場

## 大学院農学生命科学研究科・農学部

愛知演習林で第20回日本の森と自然を守る全国集会 愛知瀬戸集会が開催される

部局

12月8日(土)から10日(月)に第20回日本の森と自然を守る全国集会 愛知瀬戸集会(主催:日本の森と自然を守る全国連絡会、共催:東京大学愛知演習林・日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「青の革命と水のガバナンス」研究グループ)が、「人工林、里山林、都市の緑 - 森の緑づくりのための行政、市民、研究者

の協働」をテーマに愛知県瀬戸市で開催され、3日間で延べ283名の参加があった。

8日(土)は地方税として導入が進んできている森林環境税の現状と今後のあり方について、基調講演・パネルディスカッション・取り組み紹介が行われ、夜は交流会が行われた。



基調講演の様子

9日(日)午前には四つの分科会(人工林問題の核心、森林環境税制を考える、鉱業法で蚕食される都市の緑、流域循環・現場・原体験・(博物)館)に分かれ、活発な議論や情報交換を行い、午後の総括集会で各分科会からの原稿をまとめて本会の宣言文(<http://forester.ufa.u-tokyo.ac.jp/~kuraji/BR/20mori/071208-10sengen.pdf>)を採択して終会となった。

10日(月)には現地見学会が行われ、愛知演習林・赤津研究林、ホフマン工事跡、鉱山跡地、海上の森を見学した。



愛知演習林赤津研究林 白坂量水堰での現地見学の様子

大学院総合文化研究科・教養学部  
三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる

12月15日(土)午前10時から、三鷹国際学生宿舎において、三鷹消防署の指導・協力により自衛消防訓練が行われた。

三鷹国際学生宿舎は、鉄筋コンクリート3階建て6棟から成り、現在教養学部在籍する学生及び留学生等550名弱が入居している。建物は耐火建築であるが、宿舎の性格上火災等の防災には十分注意を払っており、その一環として万一の場合を想定し、年に1回自衛消防訓練を実施している。

今回は、地震の発生頻度が少ない国から来ている留学生が、地震多発国である日本で、ある程度揺れの大きい地震に遭遇しても慌てることのないよう、キッチンに見立てた部屋で震度7までの揺れを体験できる「起震車」を用意した。当日は天候にも恵まれ、留学生を含む宿舎生及び宿舎職員、警備員の総勢約40名が参加して訓練が実施された。

訓練は、宿舎生の居室から火災が発生したことを想定して、火災報知器の発報により、宿舎生、警備員、職員それぞれがどのように対応し安全に避難するかを確認する避難訓練から開始した。

避難訓練の後は4班に分かれて、それぞれ①屋内消火栓による放水訓練②水入り消火器を使用した消火器使用訓練③起震車による震度7の揺れ体験、コンロの擬似炎消火及び机の下への避難訓練④空室を利用した煙体験及び指定物を室内から持ち帰る訓練を交代で行った。

参加した宿舎生は消防署員の助言の下、それぞれの訓練に真剣に取り組んでいたが、「簡単な操作でもいざとなると間違えそうだ」「震度4、5程度でも実際の地震の方が怖い」といった声が聞かれた。最後に三鷹消防署から、概ね各構成員の対応は良好であった旨の講評をいただき訓練を終了した。



震度7の揺れを体験



煙体験の様子



三鷹消防署からの講評

大学院教育学研究科・教育学部

教育学研究科、北京大学教育学院およびソウル国立大学教育学部と学術交流協定を結ぶ

12月17日（月）、教育学研究科は、北京大学教育学院、ソウル国立大学教育学部と学術交流学部間協定を結んだ。同日、北京大学教育学院とソウル国立大学教育学部も学術交流協定を結び、東京大学、北京大学、ソウル国立大学の三つの教育学部でトライアングルの学術交流協定が実現した。

調印式の会場となった国連大学エリザベス・ローズ国際会議場では、金子元久教育学研究科長、ミン・ウェイファン北京大学教育学院長（代読）、チョウ・ヨンダソウル国立大学教育学部長の講演と三大学の教授の報告による国際シンポジウム「東アジア教育における経済の発展と教育の課題」が催され、三国間の教育改革の共通性と差異について議論が交わされた。同日の夜は本学山上会館において「調印祝賀パーティ」、18日（火）には国際シンポジウム「21世紀東アジアの教育と社会」、19日（水）には「三大学院生フォーラム」も開催された。このトライアングルの学術協定の調印を起点として、2008年はソウル国立大学、2009年は北京大学が主催して、三大学による国際シンポジウムと院生フォーラムを

開く予定である。



本学大学院教育学研究科と北京大学教育学院との学術交流協定の調印



本学大学院教育学研究科とソウル国立大学教育学部との学術交流協定の調印

## INTERVIEW

生物機能制御化合物ライブラリー機構  
機構長 長野 哲雄 教授 (薬学系研究科)

今回インタビューに訪れたのは、2006年6月に設置されました生物機能制御化合物ライブラリー機構の機構長、長野哲雄先生です。「生物機能制御」「化合物ライブラリー」・・・難しげな単語に、どのようなお話が聞けるのかと緊張しながら機構がある薬学部本館を訪れると、正面入口には真新しい機構の看板がかけられ、地下では3月完成予定である化合物ライブラリーの工事がまさに進められているところでした。

### Q. ずばり「化合物ライブラリー」とは？

**長野** ヒトゲノム解析は生命科学分野に大きなインパクトを与えましたが、そのインパクトは有機合成化学にも波及して、これまで臨床レベルで扱っていた事象が、基礎医学、分子生物学、さらには有機化学までを含んだ分子レベルで議論がされるようになってきました。これまで学問的連携が希薄だった有機化学と生物・医学が融合することによって、医薬開発につながる「生物機能を制御する合成小分子化合物」の開発研究が求められています。



一方で、ゲノム研究の成果に基づいてバイオ情報のデータベース整備が世界的に行なわれていますが、このバイオ情報を産業(製薬)に活かすためには機能性化合物の探索が必要になります。10万を超える化合物の中から創薬につながる「ヒット化合物」を見つけられるように、データベースと併せて化合物ライブラリーの構築が求められるのです。「化合物ライブラリー」は、「生物機能を制御する合成小分子化合物」の開発において、重要な研究基盤なのです。

### Q. 機構発足の経緯は？

**長野** 2つの流れがありました。まず、私どもにも、もともとの要望といえますか希望があったのです。ケミカル・バイオロジーと呼ばれるこの分野は、近年米国を中心として新たな領域として研究が進められてきています。併せて公的な化合物ライブラリーの構築も、アメリカを始めとし、欧米、アジアでも韓国などがすでに設立をしています。他国に負けないために、日本にも公的化合物ライブラリーを早急に立ち上げなければいけないという強い思いがありました。

一方で、文部科学省の重点施策の1つである「タンパク質解析基盤技術開発」(平成18年度)が開始されました。さらに今年度からは、この基盤開発から発展し、アプリケーションが加わったものとして、「ターゲットタンパク質研究プログラム」が開始されていますが、そうした国の施策の動きがあり、外部資金を得ることができました。

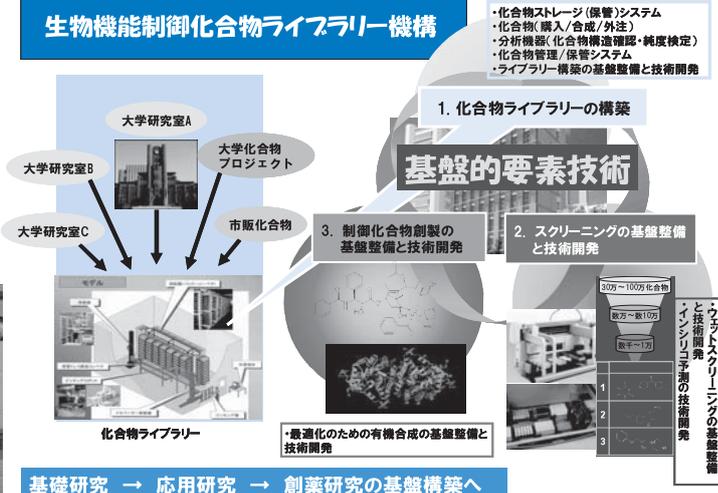
この機運に後押しされ、この分野は一研究者や一部局でできるものではなく、まさにオール東大で取り組むべき内容だと思い、世界に先駆けて生命科学研究の発展に寄与し、大学の知的財産を産業に活かし創薬研究につなげる基盤を作ることを目的に、東京大学の中に公的ライブラリーとしての機能を持つ機構を設置しようと、関係部局の部局長にお願いをしてまわり、賛同を得て機構の設置にこぎつけました。



## 総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。  
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

## 生物機能制御化合物ライブラリー機構



### Q. ライブラリー構築はサイエンス？

**長野** サイエンスではなく研究基盤構築になぜ取組むのかーいい質問をしてくれました。これには私の学生時代からの思い入れがあるのです。日本の大学における有機合成化学研究は世界トップ水準にあるにもかかわらず、多くの場合、研究室の新規合成化合物は死蔵されており、知的財産として活かされていない状況なのです。大学の中に公的ライブラリーを作り、独自の化学物の収集や保管・供給体制を構築して、この東大の拠点を基盤として大学の知的財産を製薬につなげ産業に直結できたらすごいことではないかと長年思ってきました。

### Q. 大学の知的財産の宝庫になる？

**長野** そうです。地下に30万個ほどの化合物が収容できる化合物ライブラリーを只今建設中です。現在、世の中には買うことのできる化合物が相当数存在し、このライブラリー機構でも市販化合物を購入するのですが、それに加えて大学には研究室に眠っている化合物が山ほどあるのです。そうした死蔵している化合物を収集することは大学にしかできないことです。これも東大がライブラリーを作る大きな意義だと思っています。ライブラリーに化合物を寄贈しても良いとお考えの先生はご連絡いただければ幸いです。

### Q. 今後の抱負を

**長野** 先ほど言いましたように、確かにライブラリーを構築することにそれほど大きなサイエンスがあるわけではなく、基盤の整備ですが、有効に動き出し、それがオープンになっていけば、新たなサイエンスを生み出すテーマがたくさん出てきて、生命科学研究の発展につながると思っています。そのためには、いろいろな分野、薬学、医学、理学、工学...の研究者が主体的に参画できるようになると思っています。そうすれば、ここから大学の知財につながるものが近い将来、必ずや出てくると信じています。(インタビュー: 蔭山・手塚)

● 関連ホームページ ●  
生物機能制御化合物ライブラリー機構  
<http://www.cbri.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線21387)

## 米国シリコンバレー JUNBA国際産学連携シンポジウムに参加



講演をする寺澤廣一特任教授(左上)、展示ブース訪問者への説明風景(右)、挨拶をする長嶺安政在サンフランシスコ日本国総領事(左下)。

### 海外企業との産学連携を支援します

JUNBA(Japanese University Network in the Bay Area) 国際産学連携シンポジウムが1月10日(木)、11日(金)に米国サンタクララで開催されました。JUNBAとはカリフォルニアシリコンバレー等に大学の事務所を持つ6大学(東北大学、東京理科大学、横浜国立大学、大阪大学、九州大学、鹿児島大学)の連携組織で2年前に設立されました。組織のミッションとして、米国内に拠点を持つ日本の大学間の連携を図ります。また日本の大学の国際化、国際的人材の養成、産学連携等の諸活動を支援し、日本および米国における教育・研究の発展と、産業創出に寄与する事を目指しています。

今回のシンポジウムは国際産学連携がテーマであり、在サンフランシスコ日本国総領事館、日本学術振興会(JSPS)、JETROサンフランシスコの共催で15大学が参加して、国際産学連携についての講演と技術展示が行われました。シンポジウムでは、長嶺安政在サンフランシスコ日本国総領事、小野元之日本学術振興会理事長等の挨拶に続き、米国大学から2名の招待講演がありました。スタンフォード大学から高価な装置を共有するNNIN(National Nanotechnology Infrastructure Network)の大学間連携と産学連携の現状が紹介されました。UC systemsからは産学連携の現状について説明がありました。本学産学連携本部からは寺澤廣一特任教授がGlobal-Proprius21の提案を行い、好評を博しました。夕方からレセプションが開催され、参加者や講演者と意見交換を活発に行いました。

産学連携本部は、昨年9月に制定された国際産学連携ポリシーに基づき、国際産学連携担当者を配置し、海外企業と本学研究者の産学連携を支援していきます。海外企業との共同研究等をお考えの研究者の方で、支援を必要とされる方は、ぜひご連絡ください(2月6日(水)13時半より山上会館にて文部科学省・東京大学主催で「国際的な産学連携の推進」をテーマにシンポジウムを開催します。ここではMITとUC Berkeleyから産学連携担当者を招待し、産学連携の国際標準レベルの把握および海外大学との連携の探索を行います。シンポジウムの詳しい報告は次号をご覧ください)。

## トレンドマイクロ社との共同研究の 成果を記者会見で発表

### 成果発表に多くの報道関係者が注目

1月28日(月)11時より産学連携本部2階大会室にて、「東京大学とトレンドマイクロ社による情報セキュリティ分野での共同研究の取り組みについて」の成果報告会と記者会見が行われました。有害サイトの分布や結びつきを解析した研究結果に注目が集まり、30人以上の報道関係者が出席し、質疑応答も活発に行われました。

本共同研究は、産学連携本部の価値創造型産学連携スキームであるProprius21を使い、2007年6月から2008年1月にかけて進めていた「Webリンクの構造解析」の成果の一部です。1200万以上38カテゴリに分類されたトレンドマイクロ社の膨大なデータベースを利用し、大学院情報理工学系研究科の増田直紀講師と、経済学研究科21世紀COEものづくり経営研究センターの安田雪特任准教授が解析を行いました。

詳細はプレスリリースをご覧ください。  
<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/press/2008/20080128trend-UTokyo-collaborations.pdf>



記者会見の様子。左から、海老野征雄産学連携本部Proprius21プログラムオフィサー、増田直紀大学院情報理工学系研究科講師、藤田隆史産学連携本部長/教授、大三川彰彦トレンドマイクロ株式会社上席執行役員日本代表、近藤賢志トレンドマイクロ株式会社事業開発室テクノロジーリサーチ課テクノロジーリサーチマネージャー(上)。記者会見が終わり、4人で握手をする関係者(下)

連絡先：産学連携本部 (本部産学連携グループ)  
電話：内線22857 (外線03-5841-2857)

ホームページ：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/> ※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック



とうとう東大基金が130億円を目指す、創立130周年の年度末まであと1ヶ月と少しとなってしまいました。そして、右下の基金最新情報をご覧ください。なんと130億円達成まであと9億円！渉外本部員一同、さらに頑張っております。

そんな中、第10回は寄附者でもあり、職員でもある方の声をお届けしようと、工学系・情報理工学系等事務部長の尾越和博部長にお話を伺いました。

## さらに“改革・改善”をめざして

—ご寄附いただいた経緯は？

私は東大で30年以上お世話になっているという気持ちがあって寄附をしました。

それに法人化をした現在、大学の財政が厳しくなっていることで、大学の教育研究に資する基盤的経費の安定化を図るための財源を確保する必要があるという総長のメッセージにも共感しました。



—教職員の寄附についてはどう思われますか？

私もそうなのですが、少なくとも寄附行為に関し慣習が根付いていないこともあり、寄附しようという気持ちがあっても、少ない額だと出しづらいという職員の声なども聞きます。

本来、学内が応援をすることで、内部の盛り上がりを外部へ示すことになり、額は少額だとしても寄附することに意味があると思うのですが。

—今後東大基金に期待されることは？

昨年、総長がアクションプランの説明を行っていた際に、ご説明の中で基金の使い途についても触れていましたが、もっと教職員へ基金をどのように運用し、使用するか具体的なPRを行った方がよいと思います。

基金の運用益を学生の支援、学術研究の支援、環境改善等に使用するなど明確な基準を設けることが必要なのではないのでしょうか。

それによって、基金の在り方が理解され賛同される教職員も増加すると思います。ぜひ、早く目標額に達することを願っています。

—渉外本部に期待されることは？

部局の寄附集めに対し、必要であれば渉外本部のサポートをいただけるという話ですが、部局が自ら努力することは当然なことですが、渉外本部のサポートを受けられることは非常に心強いですね。工学系や情報理工学系でそのような状況になったら、是非お願いします。

また、法人化前の東大は管理運営体制においては、いわゆる管理部門のみで構成された組織だったのですが、法人化後は管理部門の他に、産学連携本部・国際連携本部・渉外本部のような事業部門を持つ組織となりました。部局や産学連携本部・国際連携本部と連携しながら外に向けて東大を発信していく部門として、渉外本部には活躍して欲しいですね。

東大は教職員のベクトルが揃えばとても強い組織になるのではないのでしょうか。ぜひ教職員一体となって、改革・改善の動きがとまらないよう部局を絡め各部門が協力・連携していけたらと思います。

### 安田講堂銘板の自由見学日のご案内

兼ねてから東大基金ホームページにてご案内しておりますが、安田講堂に掲示させていただいております「安田講堂銘板（30万円以上ご寄附いただいた方のお名前を刻印）」を以下の日にちにご自由に見学いただけます。

また、基金に関するご質問などにも担当者がお応えします。

＜見学日＞

3月1日(土)、3月21日(金)

※時間は12時～16時まで。お申し込みは不要です。



まだご自分の銘板をご覧でない方、またどのような物か一度ご覧になりたい方は、この機会にいらしてみてください。

基金最新情報にて毎回ひっそりお伝えしている教職員参加率もついに、ついに30%を超えました！3割の方にご支援いただいたというのはすごいことです。本当にありがとうございます。

また最後になりましたが、尾越事務部長、お忙しい中のご協力、誠にありがとうございました！とても勉強になるお話を色々聞かせていただきました。（鈴木）



## 基金最新情報

6,836件 12,174,574,504円

(内教職員 2,202件)

(1月29日現在申込)

教職員参加率 30.2%

連絡先：渉外本部 鈴木

電話：内線21744(外線03-5841-1744)

HP：<http://utf.u-tokyo.ac.jp/index.html>

※「東京大学トップページ」上で「東京大学基金」をクリック

「さすてなTimes」  
第2弾!

# サステナな日々

～キャンパスから考えるサステナビリティ～

vol. 5

## 東大生から見たバリ会議COP13・京都議定書会議

昨年12月、インドネシア・バリ島にて国際会議COP（気候変動枠組条約締約国会議）が行われ、約190カ国の国と地域が参加し、地球温暖化対策をめぐる2013年以降の新しい国際的枠組み「ポスト京都」について話し合いました。

そして、なんとこの会議には、東大生もオブザーバーとして参加していました！将来のサステナビリティ学を担うかもしれない若き彼らの目に、この国際舞台はどう映ったのでしょうか。今回は、メディアや政治家が伝えないCOPの現場を学生の視点で報告していただきます。

AGS-UTSC気候変動ワーキンググループでは、毎年COPへ3～4人の学生を派遣し、情報の収集や研究者との交流を行っています。

2003年 2004年 2005年 2006年



参加することに  
意義がある

COP参加者と  
CCWGを有機的  
につなげる

多様な視点から  
見たCOP

交渉の理解

2007年



これまでの積み重ねをもとに、今年の目標は、  
“将来枠組み交渉をチームワークで見ると！”



### COP13参加者(写真、右から)

AGS-UTSC気候変動ワーキンググループ (CCWG) :  
永井雄宇 (新領域 先端エネルギー工学専攻・修士1年)  
加用現空 (工学系 建築学専攻・博士1年)  
神戸康聡 (工学系 化学システム工学専攻・修士1年)  
村山麻衣 (新領域 国際協力学専攻・博士1年) ※個人参加

### 「気候変動ワーキンググループ=CCWG」とは

東京大学AGS推進室からのご支援により、CCWGではこれまで5回に渡り延べ17人がCOPに参加してきました。国際交渉の場を観察するという経験、関係者とのネットワーク作りなど多くの学びを得ています。

CCWGの活動は「気候変動」をキーワードに、COP派遣と定例勉強会を2つの軸とし、研究やCOP参加の経験、情報の共有をもとにした議論を行っています。また母団体であるAGS-UTSCとのつながりの中で、学生視点でのサステナビリティに関する取り組みを行っています。

### サステナ (サステナビリティ; 持続可能性) とは?

環境の世紀と呼ばれる21世紀の科学技術、経済システムを語る最重要のキーワード。地球社会を持続可能なものへと導くビジョンを構築するための基礎となる新しい超学的な学術が「サステナビリティ学」(sustainability science)である。

サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) HPより  
<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/top.html>

このコラムは、サステナビリティ学を個人のライフスタイルやキャンパスと結びつけることを目指しています。



### 私たちが見たCOP

事前の予想通り、今回のCOPでも将来枠組交渉の議論が盛り上がりました。各国が自国の今後の発展と排出に関わる国際責任との間で実施可能な枠組みとすべく、交渉では決定文書に至るまでに文章の一語一句にまで議論が交わされました。交渉議題が非常に多く、多くの議論が同時進行するため、会議に追われる政府関係者もよく見受けられました。このような中で全体像をつかむためには、私たちCCWGメンバーだけでなく、現地で開催する関係者とのネットワークを通じた情報交換と情報共有の重要性を感じました。

サイドイベントでは、例年通り政府やNPOなど様々な団体がシンポジウムを主催して活動のアピールを行っていましたが、今年は、カーボンマーケットなどに関するビジネストーク関係者が多かったように思います。さらには、交渉の過程で争点となる可能性のあるトピックとして、産業別に排出削減率を設定するセクター別アプローチや、将来枠組みのビジョンとしてのPost-2012などのテーマに対して議論を交わしていました。京都議定書の第一約束期間の開始を直後に控えていた今回のCOPでは、産業界の実動と産業界による牽引が明確に現れていることを感じました。

### 科学的知見の使われ方

昨年のIPCC第4次評価報告書発表以降、科学的知見に対して世界的に関心が集まっています。私たちは、温室効果ガス排出量とインパクトの関係などの将来を予測した科学的知見が、将来枠組交渉において必要となると考えていました。実際、こういった科学的知見は必要とされていましたが、一部の抜粋となり、最終的にはそれが“科学的”というよりも“政治交渉のカード”になっていました。科学的知見の一部にはまだ不確実性が残っており、その不確実性の取り扱いがそれぞれの国や関係者によって異なってきます。交渉でこのような科学的知見の利用され方があるとは思ってもよらず、理系の研究者としては、改めて驚嘆させられました。

### 今後の展開について

今回のCOP13では、2009年までに将来枠組に関する議論を終える“バリロードマップ”が決定したものの、作業内容や詳細についての議論は先送りになりました。今後はより具体的な将来枠組の交渉となっていくと思われるので、これからの重要な2年間の世界の動きを、COPへの参加で得た経験をもとに、CCWGのメンバーと議論していきたいと思えます。私たちの活動に興味をもたれた方、是非一緒に国際動向を見守り、自分の研究や専門が還元されるよう学びを深めていきましょう。

→AGS-UTSC HP <http://ags-utsc.org/>

→気候変動ワーキンググループ HP <http://ccwg.ags-utsc.org/>

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線21387)



# ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信 第4回～



## 東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！

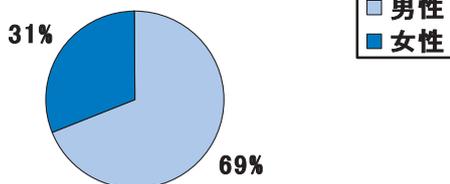


## 東大ナビの利用者は？

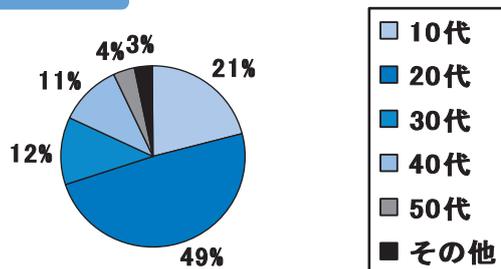
東大ナビでは現在640名（2008年1月現在）の方々に、隔週で最新のイベント情報をお知らせするメールマガジンを配信しています。登録者は学部生、院生、教員、学外の方など多種多様です。今月はメールマガジン会員の内訳より、どのような方々に東大ナビをご利用頂いているのか、グラフをご紹介します！

10～20代の学部生の登録が半分を占めますが、幅広い年齢層の方々、教職員・学外の方々にも多くご愛読頂いており、学内向けに限らず、一般向けのイベント周知にご活用頂くのも効果的かと思えます。

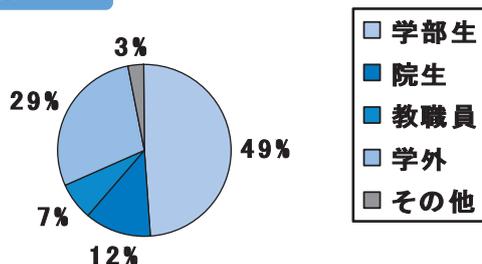
### 男女比



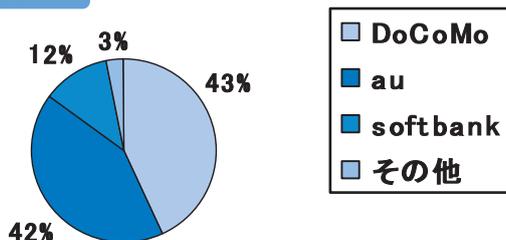
### 年代構成



### 所属別割合



### キャリア別割合



## イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
  - mail@utnav.jp宛てにメール送信
  - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能

返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など

登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



## イベントを宣伝したい方

教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線；27823（重田）
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟401号室



金 凡性

科学技術インタープリター養成プログラム特任助教

## 飛行機の使用

1月20日(日)の朝、私はボルチモアからデトロイトへ向かう飛行機に乗っていた。離陸してから30分ほど経っていたのだろうか、私は窓の外から見えてくる地形に目を奪われてしまった。地面にシワができたように、等高線にすれば縞模様になるような平行した起伏が延々と伸びていた(洗濯板のような形)。私は、なぜこんな地形ができたのだろう、と素人ながら地球の歴史が刻んできた模様に考えをめぐらせた。と同時に、この感動は私が鳥瞰図を見るような視点に立っていたからこそ可能なことにも気づいた。人間を飛ばせる技術がなかったら、この新しい視野もなかっただろう。

実は、人間を飛ばせる技術は、何かを見るだけではなく、何かを見せる手段でもあるらしい。建築史家の橋爪紳也氏は、見世物としての意味を持っていた民間飛行機の初期史を描いている。大正・昭和初期の日本。「空の黒船」に対して新聞各社は争って話題作りのための飛行イベントを催し、飛行機から宣伝チラシを撒く派手なパフォーマンスをくり広げる企業もあった。大量の旅客運送の手段になる以前、空を飛ぶ機械とは人々の目を引く宣伝のメディアでもあったのだ。いや、そのような役割が今はなくなったと断定できるのだろうか。もはや出張の時に飛行船に乗った人の話は聞かないが、広告のために空を飛んでいる飛行船の姿はたまに見るとはいつても、今となって、「航空技術」を「宣伝手段」と理解するのは短絡的だし、誤訳だろう。

しかし、このような誤訳は許されないものだろうか。1月24日(木)、科学技術インタープリター養成プログラムの社会人向け講座で総合文化研究科の小林康夫教授は、専門家の知識を日常の文脈に落とす際に誤訳は避けられないと話しながら、新しい発想・発見につながる創造的な誤訳もあり得ることをその哲学者としての腕前で披露した。もちろん、危ない誤訳は確かにある。How Users Matterの編者らは、「同時多発テロ事件が起きるまで、旅客機が巨大な火炎瓶になれるとは誰も予測しなかった」と書き記している。ある技術の誤用を防ぐためにも、それまでを想定する想像力が必要なのではないだろうか。

私がボルチモアで飛行機に乗ったのはアメリカの地形を観察するためではなく、デトロイト経由で東京に帰るといふ、旅客機本来の目的(?)に従ってのことだが、結果的には立派な遊覧になってしまった。神戸に住んでいた時、夜の伊丹空港に着陸する度に空から一望できた大阪キタ・ミナミ・大阪城の綺麗なパノラマは、今も変わらず目に焼きついている。飛行機で何ができるのか、私には飛行機から見る、飛行機を見る能力しかないが、色んな想像をしてみる資格はあるのだろう。

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.its.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

## コミュニケーションセンターだより No.44

### ■スタッフおすすめ商品のご紹介

#### ■「VOL.1 大木扇-瞞人-」 ●価格：2,940円(税込)

※大木扇とは…東洋文化研究所 大木康教授の著書より選り抜かれた歌を表裏に書した高座扇です。東大の研究商品としてコミュニケーションセンターで紹介しています。



農学生命科学研究科  
農業資源経済学専攻  
食料資源経済学研究室  
修士1年 加藤 史彬

大木扇がリニューアルしました！！  
今回は蘇州の俗謡を集めた「山歌」の中の「瞞人」という歌です。恋人との密かな逢瀬を表現するためのトリックを詠んだ歌で、男女の粋な世界がテーマになっています。  
海外のお客様や先生方のお土産に好評を博しております。店内のパネルに詳しい歌の解説も記載されていますので、是非一度センターまで足を運んでみて下さい！！

### ■店内NEW展示コーナー

#### ■「貝のモバイルミュージアム」



(書籍コーナー：全体写真)



(貝：拡大写真)

(担当：コミュニケーションセンター 山下)

総合研究博物館では選りすぐりのコレクションを企業のオフィス空間等に貸し出ししており、コミュニケーションセンターでもその一部をお借りし、展示することになりました。今まで殺風景だった書籍のコーナーが明るく、存在感のある空間になりました！！

お客様にも大変好評で、皆さん立ち寄って見て下さっています。存在感ある貝のモバイルミュージアムを是非見いらして下さい。



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター  
The University of Tokyo  
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

## ワタシのオシゴト / 第24回

Rings around the UT

教育学部図書チーム

丹藤 寛子さん

## 図書室のお姉さんやっています

東大職員として採用されて4年。教育学部に配属されて半年経ちます。教育学部図書室では、業界用語でILLとか相互利用とか呼ばれる業務を主に担当しています。図書室にない本や論文を他大学の図書館から取り寄せる仕事です。外部の大学だけでなく、東大内の他のキャンパスからも取り寄せできますし、Webから申し込むこともできます。文献調査をしてどうしても論文が見つからない！という時などは、一度お近くの図書館にご相談ください。



本より重い物は持った  
ことありません



図書室のメンバーは楽しい人ばかりです

4年経っても図書館職員としてはまだまだ未熟。他の職員のみなさんが優しいので、つい甘えてしまうこともあります。学生さんに質問されて戸惑ってしまうこともしばしば。それでも感謝の一言はとても嬉しいもので、次もがんばろう！と元気になります。いつになったら一人前になれるのかなあと思いつつ、毎日本を持ってあっちへ行ったりこっちへ行ったりしています。

**得意ワザ:** ライブでどんなに騒いでもメガネを壊さない。

**自分の性格:** ネタ好きうっかりマイペース

**次回執筆者のご指名:** 小島 裕美子さん

**次回執筆者との関係:** 法学部でお世話になった先輩  
(高校が一緒！)

**一言紹介:** とっても頼りになるおねえさんです。

噴水



教育学部附属中等教育学校

2007年度音楽祭開催される

1月19日(土)12時30分～16時まで、アミュー立川(立川市民会館)大ホールで、「音楽祭」が開催された。音楽祭は、前期課程評議委員会主催で、前期課程(1年～3年)が、クラス単位で合唱する行事である。当日は、400名を超える大勢の保護者の方々もお越しいただき、会場はいっぱいとなった。

衛藤隆学校長のあいさつ、学生歌「若い力」の全体合唱で始まり、「課題曲」「自由曲」が、それぞれ、1年生、2年生、3年生の順に披露された。課題曲は、1年生「怪獣のパラード」、2年生「名づけられた葉」、3年生「聞こえる」であった。審査の結果、今年は3年生が各賞を独占し、上級生の実力をみせつけた。

閉会式で、三橋俊夫副校長は、「自由曲の出来が勝負を分け、本校の教育の目標としている“5つの力”のうち、「身体・表現の力」「関係の力」がついたことがよくわかった」と講評を述べた。また、前期課程評議委員長の3年草壁匠さんは、「音楽祭が終わり、力を出しきったすがすがしい気持ちであり、この行事が1年生～3年生までがまとまって、素晴らしいものになった」と、感謝の気持ちを述べた。

以下に部門別の順位を明記する。

<課題曲部門>

1位 3年B組 2位 3年A組 3位 3年C組

<自由曲部門>

1位 3年C組「Million Films」

2位 3年A組「瞳をとじて」

3位 3年B組「ボクノート」

<総合>

1位 3年A組 2位 3年B組 3位 3年C組



総合1位の3年A組の合唱風景

# INFORMATION

## シンポジウム・講演会

### シンポジウム・講演会

医科学研究所

特定領域研究 幹細胞の可塑性と未分化性維持機構成果公開シンポジウム

開催日時：2月27日（水）9：30～16：45  
場 所：学術総合センター（東京都千代田区一ツ橋）  
テ ー マ：幹細胞研究を支える新しいテクノロジー  
特別講演：iPS細胞を考える

\*本会議はどなたでも御参加いただけます。入場無料。

21世紀の新しい治療法として「再生医療」が注目されています。その成功の鍵を握る幹細胞は、多様な細胞に分化できる能力「多分化能」と多分化能を維持したまま増殖できる能力「自己複製能」を兼ね備えた細胞と定義され、分化と自己複製を繰り返しながら各臓器・組織の発生、修復、維持を担っています。5年間にわたる文部科学省特定領域研究「幹細胞の可塑性と未分化性維持機構」の成果をテクノロジーを中心に発表します。また、特別企画として「iPS細胞を考える」と題した山中伸弥教授による講演とディスカッションの場を設けました。

\* \* \*

多数の方々のご来聴をお待ちしております。研究室の若手研究者、大学院生の方々もお誘い合わせの上、ご来場いただけますようお願いいたします。

幹細胞研究の貴重な情報交換の場となるものと確信しております！

問い合わせ先

領域代表者：中内啓光 教授

事務担当：斎藤

医科学研究所 ヒト疾患モデル研究センター

幹細胞治療（高次機能）研究分野  
〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1  
電話 03-5449-5331 FAX 03-5449-5451  
E-mail: saito-m@ims.u-tokyo.ac.jp  
URL: <http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/sct/>

### シンポジウム・講演会

東京大学グローバルCOEプログラム

「セキュアライフ・エレクトロニクス」国際シンポジウム

東京大学グローバルCOEプログラム「セキュアライフ・エレクトロニクス」主催による国際シンポジウムを、3月6日（木）～7日（金）の2日間、本学本郷キャンパス工学部2号館1階講堂にて開催いたします。"Secure-Life Electronics -Advanced Electronics for Quality Life and Society-"をテーマに、海外の著名研究者6名による招待講演、本事業推進担当者13名による講演、および本グローバルCOEを構成する約60研究室によるポスター発表を通じて、安全安心な社会の構築と先端エレクトロニクスとの関わりや将来のあり方を議論します。多数の方々のご参加をお待ちしております（参加費は無料です）。

「セキュアライフ・エレクトロニクス」  
国際シンポジウム

International Symposium on Secure-Life Electronics -  
Advanced Electronics for Quality Life and Society -

日程：3月6日（木）、7日（金）

場所：本郷キャンパス工学部2号館1階講堂(213号室)

--- 特別講演 ---

Overview of Recent Advances in Fiber Grating Sensor Technology

Dr. Eric Udd, President, Columbia Gorge Research, LLC

QoLT: Quality of Life Technology - Opportunities and Challenges

Prof. Takeo Kanade, Robotics Institute, Carnegie Mellon University

Bio-optoelectronics (tentative)

Prof. John F. Ryan, Clarendon Laboratory, University of Oxford

Dynamic vision with events

Prof. Tobi Delbruck, Institute for Neuroinformatics, UNI-ETH Zurich

Advanced GaAs based nanostructures and their

potential use in quantum information technology  
Prof. Gerhard Abstreiter, Walter Schottky Institute,  
Technische Universität München

Quantum Dots and Nanowires for Optoelectronic  
Device Applications  
Chennupati Jagadish, Australian National University  
---- 本グローバル COE メンバーによる講演 ----

未来社会を担うセキュアライフ・エレクトロニクス  
保立 和夫 教授  
社会基盤、安全安心、先端技術のためのセンシング  
何 祖源 准教授 保立 和夫 教授  
齋藤 宏文 教授  
田畑 仁 教授  
情報処理・ネットワーク技術  
柴田 直 教授  
近山 隆 教授  
環境・エネルギーと制御技術  
山地 憲治 教授  
堀 洋一 教授  
セキュアライフ・エレクトロニクスのための機能デバイ  
ス・マテリアル  
荒川 泰彦 教授  
平本 俊郎 教授  
大津 元一 教授  
平川 一彦 教授  
田中 雅明 教授

組織委員長：保立和夫 教授（電子工学専攻）  
プログラム委員長：田中雅明 教授（電子工学専攻）  
問い合わせ先：電気系 COE オフィス  
Tel: 03-5841-6793 FAX: 03-5841-1160  
E-mail: coe21@ee.t.u-tokyo.ac.jp

プログラムなどの詳細はホームページ <http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/gcoe/> をご参照ください。

また、ホームページより参加登録をお願いいたします  
(当日参加も可能です)。参加費は無料です。

## シンポジウム・講演会

大学院教育学研究科・教育学部

3/20 (木・祝日) 開催 国際シンポジウム  
「医療・福祉の現場で役立つ心理専門職とは」

医療サービスの利用者においては、病や障害を抱える  
患者や家族の苦悩を丁寧に聴き取り、心理的援助を行う  
心理職へのニーズが非常に高まっている。そこで、本学  
の臨床心理学コースでは、2006年に米国心理学会の臨  
床心理学部会の会長を務めた Gerald C. Davison 教授を

招待して、シンポジウムを開催する。

【主催】 本学大学院教育学研究科臨床心理学コース  
【日時】 3月20日(木曜・祝日) 11時～17時  
【場所】 安田講堂(同時通訳付)  
【申込】 名前/所属(学生の場合は学年も)/  
電話(またはFAX)番号を記載のうえ、メール  
にて sympo@p.u-tokyo.ac.jp に事前申込。

【参加費】 1000円(学生500円)

【定員】 800名

【プログラム】

開始にあたって(11:00～11:30)

開会の辞：加藤進昌(本学医学系研究科 名誉教授)

### 第Ⅰ部 米国における現状と課題(11:30～12:30)

招待講演 アメリカにおける心理専門職の教育と訓練  
－医療現場で役立つ心理職を育成する－  
講演者 Gerald C. Davison(米国心理学会(APA)臨  
床心理学部会長(2006年))

指定討論 村瀬嘉代子(日本臨床心理士会長)

### 第Ⅱ部 日本の現状と課題－現場からの要望－ (13:30～14:30)

- 1) がん医療の現場から 内富庸介(国立がんセン  
ター 精神腫瘍学開発研究部長)
- 2) 患者支援の現場から 山口育子(ささえあい医療  
人権センター COML 事務局長)
- 3) 児童福祉の現場から 竹下利枝子(千葉県東上総  
児童相談所所長)

### 第Ⅲ部 今後の発展に向けて(15:00～17:00)

- 1) 日本の臨床心理学の課題 下山晴彦(本学教育学  
研究科 教授)
- 2) リエゾン医療の立場から 中嶋義文(三井記念病  
院 精神科部長)
- 3) 厚生労働行政の立場から 宮腰奏子(厚生労働省  
雇用均等・児童家庭局家庭福祉課課長補佐)

## お知らせ

### お知らせ

#### 退職教員の最終講義

学内広報では、今年度末をもって本学を退職される  
方々の最終講義のお知らせを掲載します。

大学院工学系研究科・工学部

越 光男 教授

(化学システム工学専攻)

日時：3月7日（金）15:00～17:00

会場：工学部5号館51講義室

演題：「素反応と反応機構」

#### 生産技術研究所

安岡 善文 教授

（人間・社会系部門）

日時：3月19日（水）16:00～17:30

会場：駒場Ⅱキャンパス総合研究実験棟（An棟）  
2階コンベンションホール

演題：「地球環境の計測と評価、10年」

連絡先：syomu@iis.u-tokyo.ac.jp

#### お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第509（2月6日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第509号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

野矢茂樹：駒場の哲学～二つの授業風景～

恒川恵市：駒場の思い出——迷走の四〇年

菊川芳夫：素粒子の質量の謎に挑む

上村慎治：真核生物のベン毛と繊毛

山崎信一：シンポジウム「地域史」と歴史教育

宮下志朗：海の旅～文明の出会いと共生～世界イタリア語週間記念シンポジウム

川中子義勝：〈本の棚〉『受難の意味～アブラハム・イエス・パウロ』宮本久雄・大貫隆・山本巍編著  
著—共苦のアグラへの招き—

甚野尚志：〈本の棚〉石田勇治編著『図説 ドイツの歴史』

#### お知らせ

附属図書館

柏図書館映画上映会 & ミニコンサート

柏図書館では、館内のメディアホールで映画上映会を開催しています。今回は、大学院生・教員による企画「わくわくミニコンサート」とタイアップして行います。どなたでもご参加いただけますので、皆様お誘い合わせの上お気軽にご来場ください。

【日時】2月28日（木）17時30分～20時

【場所】柏図書館

入場無料・申込不要・中途入退場自由

#### 【内容】

17時30分～19時 柏図書館メディアホール  
ロシア映画『こねこ』（1996年）

迷子の子猫と音楽家家族の物語（字幕日本語）

19時～20時 柏図書館メディアプロムナード  
『わくわくミニコンサート』（軽食付き）

管楽器・弦楽器・小アンサンブル・歌など

募集した出演者によるさまざまなジャンルの音楽

【問い合わせ先】柏図書館（TEL）04-7136-4220

#### お知らせ

本部学生支援グループ

第54回東京地区国立大学連合文化会美術展  
（国公立展）のご案内

都内の国立大学11校の美術系サークルの作品が一同に集まる展覧会「東京地区国立大学文化会美術展 都内国立大学11校美術部合同展」（国公立展）が今年は一橋大学が当番校となり、以下の日程にて開催されます。

この美術展は、実施までおよそ1年をかけ、学生が主体となって企画を行うもので、テーマ（今年は“色”）に基づく各大学の共同作品等、多種多様な作品が展覧され、学生間の交流を促進するとともに、活動意欲を刺激する場となっています。

本学からは毎年、美術サークル（本学届出学生団体）が参加しています。

是非、この機会に学生達の成果をご覧ください。

日時：3月4日（火）～3月9日（日）

10:00～18:00

（初日は12:00～18:00、

最終日は10:00～17:00）

場所：目黒美術館（目黒区目黒2-4-36）

入展料：無料

参加大学：一橋大学、東京大学、東京学芸大学

東京外国語大学、東京農工大学

東京海洋大学、東京医科歯科大学

お茶の水女子大学、電気通信大学

東京工業大学、首都大学東京

HP：<http://kokkouritsuten54.com/>

【本件に関する問合せ先】

本部学生支援グループ学生生活チーム

宮内（内線：22514）



## お知らせ

### 本部学生支援グループ

### 東京大学山中寮営業休止と「東京大学山中寮内藤セミナーハウス」の新営工事について

昭和3年竣工以来70有余年多くの利用に供してきた東京大学山中寮につきましては、長らくの利用により施設各所に老朽化が著しく、関係各所において建替計画を検討しておりましたが、内藤明人（ないとうあきと）・リンナイ株式会社代表取締役会長より私財をご寄附いただいたことを受けて、本部共通施設運営委員会及び関係WGにおいて具体的計画策定を進めてまいりました。そしてこの度実施設計にも概ね目途がつきましたので、2009年春オープンを目指し、この春より新営工事に取り掛かることとなりました。

よって現・山中寮の利用については3月31日（月）をもって営業を休止いたします。3月31日（月）迄の利用については下記のとおりです。

## 記

**利用期間：**2008年3月31日（月）迄

**申 込：**利用日の10日前迄  
（キャンセルは3日前までをお願いします）

**定 休 日：**水曜日・木曜日

**料 金：** 学 生 1,500円 朝食 350円  
教職員 1,800円 夕食 650円  
卒業生 1,900円  
同伴者 2,000円

※宿泊利用の場合、利用者のうち1名が運動会に入会している必要があります（但し学部学生は運動会員となっています）。

**施設場所：**山梨県南都留郡山中湖村平野 506-296  
（新宿バスターミナルから直通バス2時間半）

**申込場所：**【本郷】御殿下記念館東京大学運動会窓口  
（本部学生支援グループ体育チーム内）  
TEL 03-5841-2510

【駒場】教養学部学生支援課  
（アドミニストレーション棟8番窓口）  
TEL 03-5454-6079

### 留意事項

・同施設は寒冷地に位置し、配管凍結の可能性が高い

ことから、冬期の浴室利用を停止しております。宿泊をご希望の場合にはご留意下さい。

なお、本年4月より工事を開始し、2009年春のオープンを目指している新施設については、寄附者である内藤氏及び従来名称「東京大学山中寮」から、「東京大学山中寮内藤セミナーハウス」と命名されます。

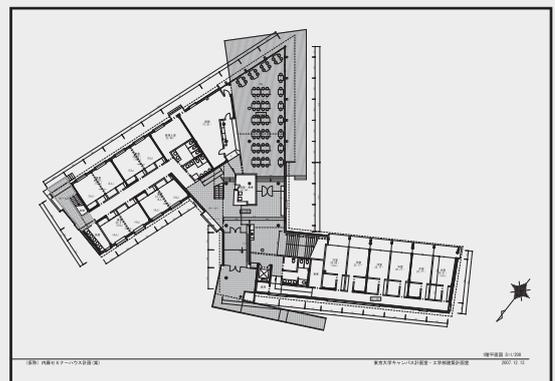
施設は一部内装等に現施設の木材を利用した2階構造であり、計100名収容可能な宿泊設備のほか、ミーティングから講演まで幅広い利用が可能なセミナールームを設置し（大小あわせて3室）、自然豊かな周辺演習林を一望できる浴場、ダイニングの前に広がり自然を楽しみつつ利用者が語り合うことのできるアンフィシアターを設けるなど、それぞれ利用者が学生・教職員の立場を超えた「出逢い」を体験できるものとなっております。

また課外施設についても、従来からあるグラウンドに加え、富士演習林内でのウォーキング、夏にはヨット等も楽しむことが出来ます。また山中湖・富士山その他周辺施設・観光名所を楽しむ際のベースキャンプとしても最適でしょう。

研究室であればゼミ・演習・学会など、学生団体であれば合宿・旅行などに、是非ご利用下さい。



新施設立面図



新施設平面図（1階のみ）

### （連絡先）

本部学生支援グループ体育チーム  
TEL 03-5841-2510  
FAX 03-5841-2523  
E-mail taiiku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

## お知らせ

### 情報基盤センター

#### 「お試しアカウント付き並列プログラミング講習会（試行）」開始について

##### ■開催趣旨

情報基盤センターに設置されたスーパーコンピューター（以降、スパコン）の利用促進、および利用を検討している新規ユーザを対象とした、スパコンを用いた並列プログラミング講習会（MPI および OpenMP を用いるもの）を実施します。

##### ■対象者

情報基盤センターのスパコンのアカウントを所有しているユーザのみならず、今後の利用を検討している方（教員、学生など）を対象にします。

##### ■受講資格

- ・情報基盤センターのスパコンの利用資格があること。
  - ・C言語およびUNIXの基礎知識を有していること。
- ただし、並列プログラミングの知識・経験は必要ありません。

##### ■開催日時

3月4日（火）9：30～17：45

情報基盤センター 4階 413 遠隔講義室

##### ■講習会プログラム：

- 9:30～10:00 受付
- 10:00～10:30 ノートパソコンの設定  
(SSH環境のインストール)
- 10:30～11:00 スパコンへのログイン、  
テストプログラム起動
- 11:00～12:00 講義：並列プログラミングの基礎
- 13:00～14:30 OpenMP プログラミング実習
- 14:30～14:45 休憩
- 14:45～16:15 MPI プログラミング実習（Ⅰ）
- 16:15～16:30 休憩
- 16:30～17:45 MPI プログラミング実習（Ⅱ）

##### ■詳細および申込方法

受講生に、一週間有効となるスパコン（HITACHI SR11000/J2 モデル）のアカウント（お試しアカウント）を発行します。なお当日は、受講生が自分のノートパソコンを持ち込み、お試しアカウントを利用した演習を行います。

詳しくは講習会のホームページ：

<http://www.cc.u-tokyo.ac.jp/seminar/kosyu/index.html> をご覧ください。上記ホームページから、講習会の申込ができます。会場の都合から、約50名に達しましたら申込を終了させていただきますので、あらかじめご了承ください。

##### ■問合せ先：

情報基盤センター 共同利用係  
kyoudou@itc.u-tokyo.ac.jp

## お知らせ

### 分子細胞生物学研究所

#### 技術発表会開催のお知らせ

分子細胞生物学研究所では、今年度以下の予定で技術発表会を開催することになりました。

日 時 3月5日（水）13：00～15：00

会 場 分子細胞生物学研究所本館1階会議室

参加費 無料

問い合わせ先 [tasakura@iam.u-tokyo.ac.jp](mailto:tasakura@iam.u-tokyo.ac.jp)

##### プログラム

「エンハンサートラップ法によるショウジョウバエの挿入突然変異系統の作成」 形態形成 前山 有子

「膜蛋白質の結晶化に向けて」

生体超高分子 杖田 淳子

「マウス zinc-finger タンパク質 Ezi の核局在メカニズムの解析」 機能形成 西條 栄子

「大腸菌外膜リポ蛋白質 NlpBHIs の抗体作製」

細胞形成 横田 直子

「IAM カルチャーコレクションの軌跡と研究業務」

バイオリソース 三浦 義治

## お知らせ

### 保健センター

#### 本郷支所診療時間の一部変更（延長） のお知らせ

保健センター本郷支所では、1月から内科と耳鼻咽喉科の診療時間が変更になりました。従来の診療時間を延長し、学生や教職員の皆様がより利用しやすくなりました。詳細については、当センターホームページ内の「本郷支所」または本郷支所内の掲示等をご覧ください。

また診療時間の延長に伴い当センターの教職員の休憩時間も変更となったため、緊急の場合は事務室（内線22574・22575）へご連絡ください。

なお保健師・看護師によるケガ等の応急救護は休憩時間中も従来どおり行っています。

<参照>保健センターホームページ内「本郷支所」:

<http://www.hc.u-tokyo.ac.jp/hhomeflame.htm>

## お知らせ

### 保健センター

#### 前期日程・後期日程試験に伴う休診 のお知らせ

保健センター（本郷支所・駒場支所）では、下表のとおり休診とします。

月 日	支所・診療科等	
2月25日(月) 26日(火)	保健センター本郷支所・駒場支所	休 診 (前期日程試験のため)
3月13日(木)	保健センター本郷支所 内科のみ	休 診 (後期日程試験のため)

<お問合せ>

保健センター本郷支所事務室 内線 22574  
駒場支所事務室 内線 46831

## 事 務 連 絡

### 人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現） 職等
（退 職）			
20.1.31	中川 英刀	辞 職（理化学研究所横浜研究所チームリーダー）	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授
（採 用）			
20.2.1	遠藤 秀紀	総合研究博物館教授	京都大学霊長類研究所教授
20.2.1	八代田 英樹	大学院薬学系研究科准教授	
20.2.1	長村 文孝	医科学研究所附属病院准教授	医科学研究所研究拠点形成特任教員
20.2.1	中邑 賢龍	先端科学技術研究センター教授	先端科学技術研究センター特任教員
（昇 任）			
20.1.16	唯 美津木	大学院理学系研究科准教授	大学院理学系研究科助教
20.2.1	三坂 巧	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
（配 置 換）			
20.2.1	加藤 千幸	生産技術研究所附属革新的シミュレーション研究センター教授	生産技術研究所教授
20.2.1	吉川 暢宏	生産技術研究所附属革新的シミュレーション研究センター教授	生産技術研究所教授
20.2.1	堤 敦司	生産技術研究所附属エネルギー工学連携研究センター教授	生産技術研究所教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

# Contents

## 特集

- 02 本郷地区、自動車入構有料化へ

## NEWS

### 一般ニュース

- 08 本部施設企画グループ  
第2回柏国際学術都市支援会の開催

### 部局ニュース

- 08 大学院総合文化研究科・教養学部  
三鷹国際学生宿舎で「新年会」開催される
- 09 大学院理学系研究科・理学部  
ひらめき☆ときめきサイエンス「熱帯植物の不思議をさぐる PART 2」開催される
- 10 生産技術研究所  
二木かおりさん（工学系研究科物理工学専攻博士課程3年）、「第5回東京大学学生発明コンテスト・発明大賞」受賞
- 11 東洋文化研究所  
森本一夫准教授 第1回「ファーラービー国際賞」を受賞
- 11 生物生産工学研究センター  
創立130周年記念事業・東京大学シンポジウム「環境生命科学における微生物・植物バイオテクノロジーの最先端」開催される
- 11 大学院農学生命科学研究科・農学部  
愛知演習林で第20回日本の森と自然を守る全国集会 瀬戸集会が開催される
- 12 大学院総合文化研究科・教養学部  
三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる
- 13 大学院教育学研究科・教育学部  
教育学研究科、北京大学教育学院およびソウル国立大学教育学部と学術協定を結ぶ

## コラム

- 14 発掘！総長室総括委員会 ～東大に生まれる新組織たち～ 第5回
- 15 Crossroad 産学連携本部だより vol.27
- 16 Step by Step 東大基金通信 第10回
- 17 サステナな日々  
～キャンパスから考えるサステイナビリティ～ vol.5
- 18 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信 第4回～
- 19 インタープリターズ・バイブル vol.12
- 19 コミュニケーションセンターだより No.44
- 20 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第24回
- 20 噴水 教育学部附属中等教育学校  
2007年度音楽祭開催される

## INFORMATION

### シンポジウム・講演会

- 21 医学研究所  
特定領域研究 幹細胞の可塑性と未分化性維持機構成果公開シンポジウム
- 21 東京大学グローバル COE プログラム  
「セキュアライフ・エレクトロニクス」国際シンポジウム
- 22 大学院教育学研究科・教育学部  
3/20（木・祝日）開催 国際シンポジウム「医療・福祉の現場で役立つ心理専門職とは」

### お知らせ

- 22 退職教員の最終講義
- 23 大学院総合文化研究科・教養学部  
「教養学部報」第509（2月6日）号の発行  
——教員による、学生のための学内新聞——
- 23 附属図書館  
柏図書館映画上映会 & ミニコンサート
- 23 本部学生支援グループ  
第54回東京地区国立大学連合文化会美術展（国立展）のご案内
- 24 本部学生支援グループ  
東京大学山中寮営業休止と「東京大学山中寮内藤セミナーハウス」の新営工事について
- 25 情報基盤センター  
「お試しアカウント付き並列プログラミング講習会（試行）」開始について
- 25 分子細胞生物学研究所  
技術発表会開催のお知らせ
- 26 保健センター  
本郷支所診療時間の一部変更（延長）のお知らせ
- 26 保健センター  
前期日程・後期日程試験に伴う休診のお知らせ

## 26 人事異動（教員）

### 淡青評論

- 28 雑感：高校生のもつ学問イメージ

### ◆表紙写真◆

本郷キャンパス薬学ゲート（2ページに関連記事）

## 編集後記

寒風吹きすさぶ中、表紙用写真を撮りに薬学ゲートまで行ってきました。今回の特集は「本郷地区自動車入構有料化」。実は構内駐車問題は今に始まったことではありません。昔の学内広報を見ると、既に昭和40～50年代

頃に駐車車両がずらりと並んだ写真が掲載されています。東大という「街」をより良くしていくために、様々な意見が出され、新たな改善案が試行される……学内自治の力は、東大の生命力そのものと言うべきかもしれません。(し)



七徳堂鬼瓦

## 雑感：高校生のもつ学問イメージ

私的な出来事から筆を進めることをご容赦いただきたい。過日、出身高校の高校生 20 名が、進路指導室の先生に引率されて、はるばる北海道から本学を訪れた。OBとしては微力ながらお役に立てることもあるのかと思い、「自分が今取り組んでいる研究」や「東京大学での学生生活」について自分の経験をまじえて語った。

筆者の拙いプレゼンテーションのあと、高校生からいくつかの質問を受けた。が、それに答えているうちに、少し心に胸騒ぎを感じた。彼らの言葉の端々からにじみでる、彼らの「学問観」が、あまりに素朴であるように思えたからである。仮に、極端に表現することがこの場で許されるのなら（決して高校生たちがこういうことを言っていたわけではない）、彼らの学問イメージは、「社会が得意だから社会学」「心理学をやると、他人の心がわかる」「教育学をやると先生になる」といった、ある種のステレオタイプに囚われているような感じがした（例が人文系に偏っているのは、筆者の専攻がそれであるからである）。

本学は、Late specialization の教育理念のもと、教養学部を有しているので、大学進学後、ゆっくりと自分の進路を選択すればよいのかもしれない。しかし、教養学部を解体してしまった多くの大学はそうはいかない。あまりに素朴な学問観によって、高校生たちが、たとえば「本が好きだから文学部」「情報をやりたいので工学部」といった進路選択をしてしまわないのだろうか。少し心配してしまった。

高校生がもつ学問イメージが、学問に身をおく人間から見て素朴に見えるのは、ある種、やむなきことである。大学進学後、それは少しずつ「脱構築」されるだろう。しかし、可能であるならば、もう少し早く、進路選択を行う高校生に「学問のイメージ」をわかりやすく伝えられないだろうか。

筆者は、研究を行う一方、本学の「教育の情報化プロジェクト」の推進に深く関わっている。東大オープンコースウェア、東大テレビ、東大ポッドキャスト、東大ナビなど、様々なメディアを使って、本学の知の最先端を社会の人々に伝えるプロジェクトを推進している。将来、大学の教室で学ぶ高校生に対して、我々ができることは何か。深く考えさせられる一日であった。

中原 淳（大学総合教育研究センター）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No.1369 2008年2月18日  
東京大学広報委員会

〒113-8654  
東京都文京区本郷7丁目3番1号  
東京大学本部広報グループ  
TEL : 03-3811-3393  
e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
<http://www.u-tokyo.ac.jp>